

滑稽と俳句の伝統(1)

伊藤浩睦

会員約二百人、読者三百人ほどの俳句誌の編集と発行を、本業である作家業の傍らにやっていますが、今の俳句は、内容に乏しいことを、みんなが同じように、何十年も言っているのではないかという疑問をもっていました。

会長の八木さんはこのような俳句を、真面目な俳句と仰いますが、私には、無意味で馬鹿馬鹿しい俳句と感じられてなりません。

吟行に行けば、地名+当日の天気+季語の組見み合せの句ばかりが、ぞろぞろと出てきます。使う季語は、夏であれば涼し、秋ならば露けしが半ばを占めるような状態でした。

定例の句会では、お題として出されている季語と、風、光、雨といった無難な気象現象と、揺れる、濡れる、静かといった、無難な形容詞だけで作った句がやたらと目に付くのです。

個性のきらめきが文芸であるのに、その反対に皆と同じ無難な気象現象と無難な形容詞を言っていれば良いといった感覚になっている俳句が多すぎました。

没個性で皆と同じ句を作っていればいい、そして年功序列で仲間内での立場を上げてゆけばいい、といった考え方が多くて、主宰もその方が楽なので、没個性で年功序列を薦めるような指導をしています。

私の作っている俳誌は前の主宰からの流れで「ホトトギス」系の人たちが作っている伝統俳句協会に入っていました。明けても暮れても高濱虚子の礼賛ばかりで、

同じような没個性の句を、同じようにみんなに作らせて、それが俳句の伝統だとしているように感じられました。

「ホトトギス」の場合は、俳句の内容の進歩や変化を極端に嫌い、永久に同じパターンで俳句を作っていれば良いという指導であり、何十年か前の大会で特選になった句と同じ句が、至近の大会で特選になるという、時代の変化に文芸が対応していればありえないようなことが、しばしば起りました。

そしてひたすらに年功序列ですから、半世紀以上も同じような俳句を作り続けている、八十代から九十代の人が、毎号雑詠欄の頭の方に居座っています。

余りにも酷いと思い、「ホトトギス」も伝統俳句協会も止めた時に、朝日新聞の記事で滑稽俳句協会を知りました。

滑稽のみが俳句との立場を私はとっていません。滑稽を含めた、諧謔、機智、見立て、古典や故実への活用、叙情性、挨拶などの多様性を持つのが俳句という文芸なのであり、俳句の歴史からみてもそのように理解すべきなのですが、実際の句座では、無難な気象現象と無難な形容詞を組み合わせたような句ばかりが出されて、多様性を取り込もうとした句は疎外される傾向が続いています。

そのような現実に対する挑戦をするかのように八木会長が滑稽俳句を標榜されるのは、俳句の正しい伝統を追うものであると思っています。